

僕の横に彼女が座って、
風に髪の毛をなびかせながら、
窓の外を見ている姿を想像した。

僕は、窓の外に顔を少し出して、
空を見上げた。

日が照って、まぶしい。

それほど、涼しい風でもない、
ほこりっぽい、なまぬるい風が顔にあたる。

電車の軌道が、あとへ、あとへと、流れて行くを見る。

太陽の強い光を吸収して、電車のレールが熱くなり、
グニャグニャに柔らかくなって蛇行している様に見える。

京太のわかりにくい地図をもとに、どうにか見つけた。
歯医者 は 銀閣寺のそばの、細い路地の角の家だ。

「御免下さい、御免下さい、遅れてすみません。」
と、僕は言っ て 入った。

もう、お客さんが来ていて、待たねばならなかった。

すると、先生が、「おい」と声を出すと、

「まあまあ、ようこそ、おいでやす、お坊ちゃん。」
と言っ て、先生の奥さんが、奥から出て来られた。

「さあ、さあ、お坊ちゃん、
こちらで、待って下さい。」
と、僕は奥に連れて行かれた。

行けばわかるだろう